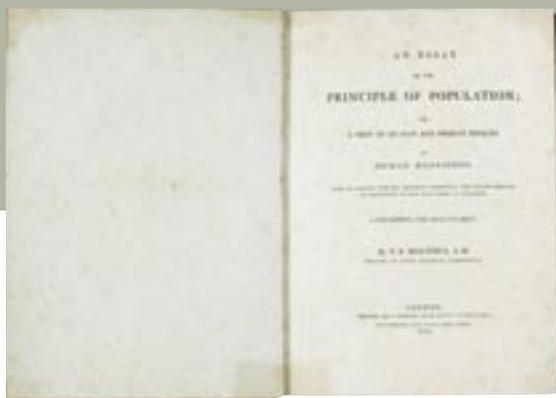


# ブック村だより

## 本学コレクション紹介(15)

マルサス『人口論』第2版, 1803年

.....	森岡 邦泰 (1)
心に残る1冊の本.....	伊藤康一郎 (2)
ぶっくす・なう.....	(4)
『あなたに似た人』	谷岡 一郎
『食べる西洋美術史『最後の晩餐』から読む』	塩田 眞典
『日本のお金持ち研究』	佐和 良作
『夕凧の街 桜の国』	下山 晃
学生選書コーナー利用状況.....	(6)
図書館を活用しましょう.....	(7)
インフォメーション・開館案内.....	(8)



### 本学コレクション紹介(15) マルサス『人口論』第2版, 1803年

本学貴重書コレクションには、マルサスの『人口論』が、初版から第6版まで収蔵されている。

東インド・カレッジでマルサスは世界で最初の経済学教授となって関心を経済学の方へ移した後も、生涯、『人口論』の改訂を続けたのだった。

『人口論』の改訂にあたり特に重要なのは、初版と第2版の相違である。分量は倍に増え、人口原理の例証のために多くの資料が付け加わるとともに、理論的にも人口抑制の原理として「道徳的抑制」が加えられ、大きな変化を見せた。他

方、初版にあった神学に関する章を削除した。その結果、著者自身「新しい本」になったといったくらいである。この第2版が後続版の基礎となった。現在、論文や研究書の引用によく用いられているジェイムズ編集の『人口論』も、この第2版を底本としている。ジェイムズ編集の決定版が出たことで、もとの版は歴史的役割を終えたといえよう。

(経済学部 准教授 森岡 邦泰)

# 心に残る 1 冊の本

梅棹忠夫『知的生産の技術（岩波新書）』  
岩波書店（1969年）

本を読み、考え、書く。そのやり方を教える本は、いま、多く存在するが、この、『知的生産の技術』は、そうした類書のなかでも、先駆けとなった名著である。刊行は1969年と古いが、今年、2008年2月の時点で、78刷と増刷を重ねるまでに、たくさんの人に読みつがれてきた、現代の古典である。

この本が出たのは、わたしが中学のころということになるが、じっさいに、それを手にしたのは、大学に入ってからのことである。正確にいつ、あるいは、なぜ、この本を読みはじめたのか、いまとなっては覚えていないが、自分なりに勉強法を考え、その手がかりを求めてのことだったと思う。

今回、この本を「心に残る1冊の本」として選んだのは、もちろん、その、若いころに受けた大きな影響を自覚してのことだが、この文章を書くために、ひさしぶりに読みかえして、驚かされたのは、その影響が自分の考えていたより、ずいぶん深いところまでおよんでいた、という事実である。

知的生産の技術とは、なにか。まず、この本の説明するところをみよう。「知的生産」ということばは、ものものしいが、「かんたんにいえば、知的生産というのは、頭をはたらかせて、なにかあたらしいことがら—情報—を、ひとにわかるかたちで提出すること」（9ページ）である。

知的な情報を生産するために、読み、考え、書く。この、昔なら研究者や文筆業者のやる仕事であったものが、いまでは、だれでもが、日常的にやらねばならない仕事になっている。しかし、だ

れでもが、やらねばならないことなのに、この仕事をどうやったらよいか、悩んでいる人は多い。そのやり方が分からない。学校でも、そのやり方をよくは教えてくれない。

じつは、研究者や文筆業者にとっても、あいまいで、しかも、見よう見まねで伝えられてきた、その、知的生産のやり方を、この本は、だれでもが分かるような、また、だれでもができるような形で、提出する。そのやり方は、「だれでもが、順序をふんで練習してゆけば、かならず一定の水準に到達できる」（8ページ）もの、という意味で、「技術」と呼ばれる。

この本が提出する、いろいろな技術のうち、もっともよく知られているのは、情報の蓄積にカードを利用する、という方法であろう。わたしも、この本によって、カードの作り方を学んだ。カードには本文のほか、上欄には見出し、下部には出典を記入する。日付も、かならず記入する。とくに注意すべきは、一枚のカードには一つのことを書く、という原則を守ることであり、といったことを。

本を読むときは、2Bの鉛筆で傍線を引く。これも、この本に習ったことである。さらに、わたしは、傍線を引くだけでなく、欄外にメモや、まとめのようなものも書きこむ。場合によっては、そのとき思いついたというだけで、その本とはなんの関係もないメモまで書きこんでしまう。そして、本を読みおわってから、あらためてページを繰り、傍線を引いた箇所や書きこみを見ながら、カードを作ってゆく。

このやり方は、長年の習慣であり、自分のオリジナルなものとはばかり、思いこんでいたのだが、今回、この本を読みかえして、じつは、これも、この本の教える技術を、そのまま実行していただ

けだ、ということが判明した。もっとも、わたしの場合、このやり方をとるのは、途中でカードを作るのがメンドウだから、という怠惰な理由によるが、この本を見ると、「このやりかたでゆくと、ほんとうにかいておかねばならないことが、よく選択できる。最初によみながらノートをとると、もっとよみすすめば当然とけてくるような疑問をかいてしまったり、とかく無駄がおおいのである」(109-110ページ)という、論拠があがっている。おかげで、わたしもこれからは、自分のやり方に、こんなになりっぱなし論拠があるのだと、言えるようになったわけである。

この本のなかに、「人間の頭のなかというものは、シリメツレツなものである」(201ページ)という記述がある。大学のころ読み、いまでも覚えているほど、その記述は、印象に残っている。なにかを書くということは、頭のなかの、この、知識やイメージの断片から、なんとか、論理的な文章を組みたてる、という作業にはかならない。この本のあげる「ござね法」(聞きなれない、そのことばの由来については、右の抜粋を見てください)は、そうした頭のなかの断片を、単語、句、あるいは、短い文章として、小さな紙きれに書きだし、その、頭の外に出された断片を、手にとって、つながりや筋によってまとめてゆく技術である。

頭のなかは、もとより十分にシリメツレツであり、そのうえ、文字の書いてない原稿用紙や、真っ白なワープロの画面を見ると、頭のなかまで、真っ白になってしまう、という「白紙」恐怖症をもわずらう、わたしにとって、そうした技術の恩恵は、限りなく大きなものであった。

情報を蓄積する技術である「カード」も、断片から文章を組みたてる技術である「ござね」も、いまのわたしは、その作業の道具として、紙ではなく、コンピュータを使う。しかし、いまの、コンピュータの時代になっても、この本の提出する、知的生産の技術の基本は、古びない。

この本には、著者が、いかにその技術を開発

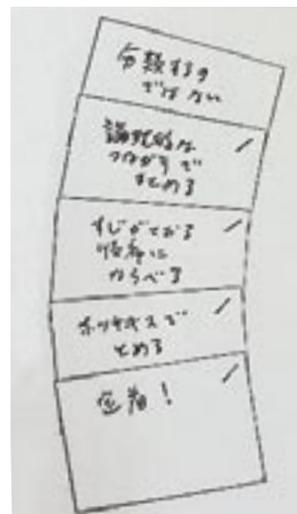
し、体系化してきたか、さらに、条件の変化に応じて、いかにそれを変革してきたか、その体験が描きこまれている。しかも、この本では、読者が自分なりの技術を開発し、体系化するよう、そして、それを変革してゆくよう、幾度となく、呼びかけがなされている。

それはつまり、いま振りかえってみるならば、この本には、その技術が古びぬよう、みずから変革すべく、読者を誘導する仕かけが、埋めこまれていた、ということである。その本のタイトルこそ、知的生産の「技術」、という硬質なものであるが、その仕かけに、まんまとはまってしまった者の一人として、この本は、わたしにとって、「心」に残る1冊の本となったのである。

(公共経営学科 准教授 伊藤 康一郎)

#### <参考> 『「ござね法」の由来』 抜粋

「…こうしてできあがった紙きれのつらなりを、わたしは「ござね」とよんでいる。中世のヨロイは、鉄やかわのちいさな板を、糸でつづりあわせてつくってあるが、その板のことを、<sup>ござね</sup>小札というのである。ホッチキスでとめた紙きれは、ちょうどそれを連想させるので、この名をつかうことにしたのであった。一枚一枚の紙きれのことも、ござねとよび、この方法のことを、ござね法ということにする。(以下略)」(203-204ページ)



## 『あなたに似た人』

(ハヤカワ文庫, 1986.4)  
ロアルド・ダール 著

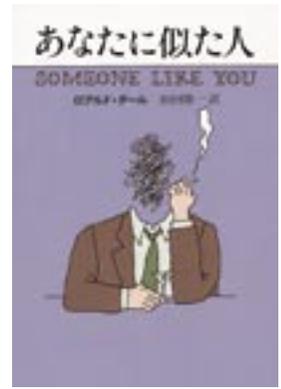
世の中に存在する多くのミステリーから、「最も好きな短編集を一冊選べ」と言われたら、たぶん選ぶのは、ロアルド・ダールの『あなたに似た人』だと思う。最近では、『チャーリーのチョコレート工場』が映画化されたため、名前を聞いた人もいるかもしれない。ロアルド・ダールは短編・中編の名手として知られ、抜群のストーリー・テリングで一瞬たりともたいくつさせない作家だ。

本書には15の短編が収められている。まずは、ワインの銘柄を当てる競争で、娘を賭けの対象にする父親の話、「味」からスタート。ヒッチコックのTVシリーズの脚本としても使われた2作目の「おとなしい凶器」、そしてギャングラーの恐

ろしい心理を描ききった3作目、「南から来た男」…と、息をつくひまもなく、超オモシロ・ストーリーがどんどん展開する。読み始めると、すぐに読み終えるはずなのだが、逆に1日1作くらいにして味わってもらいたい。登場人物もワキ役にいたるまで、目の前にいるように感じるほど、イキイキ描かれている。こういう文章を学びたいものだ。

本書で、ロアルド・ダールのファンになった人には、同じハヤカワ文庫のいくつかの短編・中編集が待っている。私が特におススメするのは、「来訪者」と「王女マメーリア」。世の中には、こんなオモシロイ書き手がいたことを知ってほしい。ダールは1990年にこの世を去った。

(学長 谷岡 一郎)



## 『食べる西洋美術史』

### 『最後の晩餐』から読む

(光文社新書, 2007.1)  
宮下 規久朗 著

最近、新書本の出版数が増え玉石混淆といった有様だが、もちろん本書は玉、この種の書には珍しく賞味期限は長そう。食にまつわる絵画に限定して論じるという着眼点が良い。俎上に載せられるのは、レオナルドの「最後の晩餐」からアンディ・ウォーホルの作品にまで至り、西洋美術史概観の態をとるものの、分析は浅薄ではない。

キリスト教世界では、聖像は偶像ではなく神に至る窓であるそう。ならば、絵画も普通なら美的鑑賞の対象であっても、同時にそれを生んだ社会に至る窓、画家の内面に至る窓ともみなせよう。著者は絵画という窓を潜り抜けそれが生み出された社会に、画家の内的世界に読者を案内し、その文脈を解き明かしてくれる。たとえば16～7世紀

頃、果実や魚介類が商品カタログみたいに生々しく描かれた静物画や風俗画の作品群が出現する。その背後には当時の食糧供給の不安定性、人々の飢餓体験が潜んでいると著者は指摘する。ナルホド。エコール・ド・パリ

の画家シャイム・スーチンの描く兎や鶏の絵が放射する異様なインパクトの背後には彼の幼少期における屠殺体験が潜んでいるとのことだ。ここでもナットク。

かような次第で本書には食にこだわりをもつ著者ならではの知見が満ちている。ただし読後、小さな図版では物足りず原画ならずとも大判カラーで確認したくなる。それが新書本の泣き所か。

(経済学部 教授 塩田 眞典)



## 『日本のお金持ち研究』

(日経ビジネス人文庫, 2008.2)  
橋木 俊詔、森 剛志 著

本書は、いわゆるハウツウ書ではなく、日本のお金持ちの実態を調査した結果を取りまとめた書である。著者たちは、「全国高額納税者名簿」に2年連続して年間納税額3,000万円以上を続けた人たちを「日本のお金持ち」と定義し、これらの人たち約9,000人にアンケートを送付するとともに、一部の人たちにはインタビューを行って分析した。なお、年間納税額3,000万円以上は年間所得にすれば1億円以上に相当する。

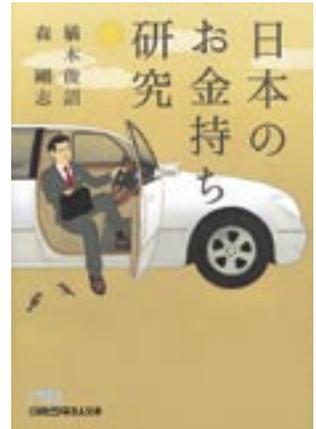
こうした研究はこれまでわが国ではほとんど行われたことがなかった。お金持ちの職種は非上場企業のオーナー経営者、開業医に多いという結論であった。大学病院や大病院の勤務医ではなく、美容外科や眼科の開業医のほうが、はるかに高い報酬を得ているという結果であった。これらの人

たちの保有金融資産は、平均で54億円だという。

インタビューの結果判明した「お金持ち」の人となりは極めて興味深いもので、決して特別な才能の持ち主というわけではない。長年一生懸命まじめに仕事に取り組んできた結果であり、「加齢に

つれてレジャーより仕事を好む」というタイプの人が大半であった。日本において、「地位の非一貫性」、すなわち高い学歴や社会的地位に所得が伴わないという点も発見であった。すなわち、「お金持ち」と「上流階級」と呼ばれる人々が必ずしも一致していないということであり興味深い。「お金持ち」に興味のある人には一読を薦めたい。

(経済学部 教授 佐和 良作)



## 『夕凧の街 桜の国』

(双葉社, 2004.10)  
こうの 史代 著

言葉はしばしば、ほくたちの心を裏切ることがあり、事実をゆがめて伝えてしまうことがある。「ほんまに好きや!」と言った途端に、気持ちの全部は伝えられなくて、何だかワケが判らなくなるような感じに包まれることもある。「公害」という言葉を耳にした途端、あなたはそれが実は特定の私企業の広域犯罪であることを忘れてしまう。

自分の体験を余り語りたがらない被爆者が少なからず居たという事実は、そうした言葉の不完全性を映し出す典型的な一例だ。無論、被爆者の思いをリアルに伝えようとして、多くの原爆文学も書かれてはいる。井伏鱒二の『黒い雨』や大田洋子の『屍の街』、原民喜の数々の著作、ノーベル賞大江健三郎の『ヒロシマ・ノート』、そして福

永武彦の『死の島』(日本文学大賞)・・・。

言葉の裏切りを緩和しようとするれば、音楽や絵画に気持ちを託すのが一案だ。キスや暴力に頼る比較的安易な手段も多々みられるが、概して余りスマートな事例は無い。

本書は、静かな語り口(描き口)の中に被爆者の日常や人との繋がりを刻み込んで、読者に様々な言葉を投げかけてくれる。しかも、おじいちゃん、おばあちゃんやお父さん、お母さんと一緒に読める時代設定になっている。ちょっとしたコマのちょっとしたセリフや墓碑銘の内容が、ものすごく本質的で大切な問題に目を向けさせてくれる。原爆文学の逸品、やがては世界的なロングセラーになる、かも。

(総合経営学部 教授 下山 晃)



## 学生選書コーナー利用状況

昨年度の選書ツアーおよび新刊カタログによる選書は、7名の学生スタッフにご協力頂きました。

現在それらの図書は2階フロア「学生選書コーナー」に配架され、人気コーナーとなっています。昨年は約1,000回の貸出がありました。貸出上位20位は紹介文つきの展示を行っており、常にほとんどが貸出中です。年間ベストリーダー上位10位は、次の通りです。

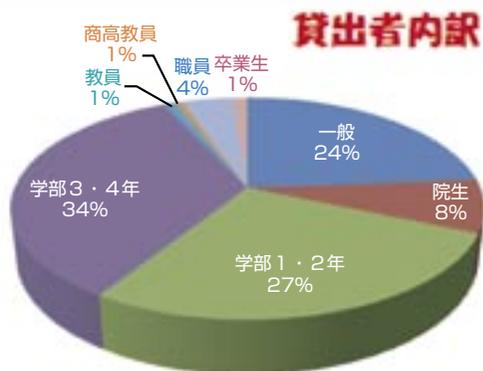
また、昨年度利用された同コーナーの人気分野ベスト10は下記の通りです。



一瞬で自分を変える法 / アンソニー・ロビンズ著 — 三笠書房 2006.11	18
学部1・2年	4
学部3・4年	6
教員	1
職員	1
一般	6
イデローの真偽 / 小西隆三著 — 集英社 2006.3	14
一般	2
学部1・2年	6
学部3・4年	6
いわゆるA級戦犯 / 高宮SPECIAL / 小林弘之著 — 日本文学 2006.8	14
一般	2
学部1・2年	3
学部3・4年	9
教員	2
卒業生	1
パチンコ「30兆円の闇」：もうこれで騙されない / 溝口眞直 — 小学館 2006.10	14
一般	2
学部1・2年	6
学部3・4年	6
教員	1
長い長い殺人 / 宮城みゆき著 — 光文社 1999.8 (光文社文庫)	13
一般	6
学部1・2年	3
学部3・4年	3
教員	2
千までの距離 / 村山由佳著 — 集英社 1999.8 (集英社文庫) / いらいこーちーのいらいろ、1)	12
一般	2
学部1・2年	5
学部3・4年	4
ちょっとアホな理論：資産寸前だったのに超V字回復でよかった！ / 志保樹明著 — 慶応義塾 2006.6	12
一般	4
学部1・2年	1
学部3・4年	5
教員	2
金持ち父さんの起業する前に読む本 - ビッグビジネスで成功するための10のレッスン / ロバート・キヨサイキ、シャロン・レウケイ著 — 実業家 2006.11	11
一般	3
院生(院研究生含む)	1
学部1・2年	3
学部3・4年	4
今さら他人(ひと)には聞けない受講100+α / エンサイクロペディア編者 — 日本文学 2006.12	11
一般	2
学部1・2年	6
学部3・4年	3
戦国軍師伝：勝機を掴む武略と後智 — 学研書文社 2007.11 (歴史群像シリーズ、新・歴史群像シリーズ、6)	11
一般	3
学部1・2年	5
学部3・4年	3

書店の店頭に並ぶ話題本から、本学の専門課程である経済・経営・商学系の図書、就職活動を意識した図書など、商大生のニーズに応じつつも偏らない、幅広い内容が好評となっているようです。

学生に人気の高いコーナーですが、利用者の内訳は下記のように、一般利用者の貸出回数が学部1・2年生とほぼ同数となっており、利用者層も幅広いようです。



学生選書ツアーは、年2回のペースで行う予定です。(5～6月、11月頃)

選んで頂いた本は優先的に貸出できます。興味のある方は是非、図書館2階カウンターへお越し下さい。

## 図書館を活用しましょう

新入生の皆さんはそろそろ大学生活になじまれたでしょうか。在学生の皆さんは学年が変わって、それぞれの進路を検討されているところでしょうか。授業と、アルバイトや趣味、あるいは就職活動とをうまく両立されるかどうか、今後の学生生活や就職への大きなカギとなります。効率よく両立するために、是非図書館をご活用下さい。

今回は実際にカウンターへ問い合わせのあった幾つかのケースをご紹介します。

卒論のテーマ選びに悩んでいます。民法の先生のゼミにいますので、とりあえず様々な判例についての情報収集をしたい。講義のなかで、「別冊ジュリスト」「判例タイムズ」などを使用しているので、とりあえず片端から見てみたいです。

「とにかく見てみたい」とおっしゃる学生さんを、(百聞は一見にしかず、)館員は書庫にお連れしました。学生さんは延々と並ぶ雑誌をみてとまどってしまいました。そこで、特集号や索引集から目星をつけ、所収の号数をチェックしていただくことをアドバイスしたのち、判例タイムズ社「判例リンク」や「裁判所ホームページ」などの判例データベースを紹介しました。

(参考URL 判例タイムズ社「判例リンク」)

<http://hanta.co.jp/link.htm>

ウェブ資源の豊富な現在、収集できる情報から有効な情報を得るためには、日頃から自分がどういった事に関心を寄せがちであるか、いま社会ではどういったことに注目がよせられているかについてアンテナを張りめぐらせておくことが大切です。情報収集の最たる手段のひとつとして、「新聞を読む」ことが挙げられます。授業中、先生から薦められた方も多いのではないでしょうか。

図書館では、5大紙と呼ばれる大手の新聞をはじめ、国内外24種類の新聞が閲覧できます。また、国内最大級のデータベースとして有名な「日

経テレコン21」より、日本経済新聞社が提供する新聞記事や企業情報データベースを検索することができます。(学内のみ)

レポート作成の参考に、ゼミ担当の先生がどのような研究をされているのか、知りたいです。

大学では先生の書かれた論文(学術論文ともいいます)をまとめて発行しています。(総称して学術雑誌と呼びます)本学の論文集「大阪商業大学論集」は索引をデータベースで検索できますので、ホームページ上のリンクを辿り、検索方法を紹介しました。



「大阪商業大学紀要目次検索システム」



また、国内の大学や研究機関に所属する研究者や研究課題を調べることができるデータベースとして、科学技術振興機構が提供する「ReaD」を紹介しました。

(参考URL:「研究開発支援総合ディレクトリ(ReaD)」)

<http://read.jst.go.jp/>

このような、目的への近道を探すお手伝いをご希望の方は、お気軽にカウンターへお越し下さい。

## 図書館インフォメーション

### ◆人気コーナーを拡充しました！

朝日新聞書評に掲載された図書のコーナー「朝日選書コーナー」および館員お薦めの映画・ドラマ原作本・売れ筋本のコーナー「お薦めコーナー」を拡大しました。

### ◆2007下半年期「学生選書コーナー」貸出ベスト20発表！（本紙6頁に詳細あり）

ベスト20を展示しています。好評につき、ほとんどが貸出中です。その他にも選書スタッフのコメントや内容紹介文を掲示していますので、一度見に来て下さい。

### ◆2007下半年期「ベストリーダー」発表！

第1位は、千原ジュニア著「14歳」（講談社、2007.1）でした。20位までを、館内各所に掲示しています。

### ◆「専門分野」貸出ベスト20発表！

第1位は、榎野順三著「ユニクロマーケティング方式」（ぱる出版、2001.5）でした。20位までにユニクロ関連は4冊ランクインしています。

### ◆平成19年度下半期に寄贈された本学教員著書は下記の通りです。

(50音順 敬称略)

※配架場所は「本学教員著書コーナー」です。貸出もできます。

- 【北川 宗忠】『観光と社会：ツーリズムへのみち』- 彦根：サンライズ出版、1998.9  
 『観光資源と環境：地域資源の活用と観光振興』- 彦根：サンライズ出版、1999.3  
 『観光：交流新時代』- 彦根：サンライズ出版、2003.4  
 『余暇時代の観光資源』- 野洲町（滋賀県）：SOU文化観光研究所、1993.9
- 【下山 晃】『交易と心性：商業文化史の表層と深層』- 東京：太陽プロジェクト、2003.3
- 【田崎 公司】『日本近代史研究の軌跡』／大石先生追悼文集刊行会編。- 東京：日本経済評論社、2007.11
- 【中津 孝司】『ガスパロムが東電を買収する日』- 東京：ビジネス社、2007.10  
 『グローバル競争を生き抜く中小企業』- 東京：創成社、2008.1 - （創成社新書；20）
- 【八尾 晃】『貿易取引の基礎』- 東京：東京経済情報出版、2007.10

## 開館案内

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24/31	25	26	27	28	29	30

日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30				

●は休館日です。（開館時間：月～土 9：00～20：00）

上記以外にも臨時休館日を設ける場合があります。

開館日程および時間は変更されることがあります。詳細は学内掲示・モニター・ホームページ等でお知らせ致します。

大阪商業大学図書館報「ブック村だより」第32号 平成20年5月31日 発行 大阪商業大学図書館  
 〒577-8505 東大阪市御厨栄町4-1-10 電話(06)6781-5280 FAX(06)6781-0089  
 e-mail : lib@oucow.daishodai.ac.jp ホームページアドレス : <http://www.lib.daishodai.ac.jp>

ISSN 1346-8928